



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1989
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

学校の仕事は人間形成

教育は家庭で始まります。両親が必要な準備をし、子供たちの教育に欠くことのできない時間を見つけて出すように、授ける必要があります。一般社会と同様に教会は奪われることも抑圧されることもできぬ両親の権利と義務に関して、彼らを啓蒙するという難しい仕事を引き受けなければなりません。

家庭教育が児童期・少年期・青年期と順序よく展開されるのであれば、それはすでに幼年期に始められなければならないかもしれません。実際、それぞれの年代は一つ前の年代から制限を受ける一方、次にくる年代への道を用意しているのです。けれども教育上必要とされる多くのことに対処するには、両親の力だけでは不十分です。今日の世界では要求がますます複雑化してくるからです。つまり教会、学校、若者のグループや協会などです。

近世以降の社会では、学校が教育の中心となる重要性を帯びるようになってきました。様々な専門職に従事するのに必要な、専門化された技術的・科学的訓練を与えることもまた、求められているからです。市民の善を目指す社会は、公立の学校と私立の学校の両方をできる限り振興します。こうして民主主義の自由と成熟過程にある世代の現在・未来の必要を保証するのです。

《学校の仕事は人間の形成です。》従って学校は、学問のみならず人間の価値と倫理的宗教的価値について考えるための思考能力や傾向をも育てなければなりません。こうした事がなされなくても授業は行えるでしょうが、教育がなされたとは言えません。本来の意味の教育を犠牲にしてまで、学校が一方的に授業のみを提供

するとすれば、生徒は傷つきます。生徒には働くため、専門職で生活するための準備だけでなく、社会や歴史問題の分析、個々の生活や集団生活の数々の問題を分析するために教育を受ける権利があるのです。教育の土台としてキリストを有するカトリック学校にとっては、この事は特に大切です。生徒が総合的な形成に欠くことのできない価値の全てをキリストの人物、行為、言葉の中に見出せるよう助けることこそ学校の役目です。

学校はまず最初に、義務教育の領域でその義務を果さなければなりません。(…)それは重要な時期です。児童や少年が教師と接触するようになる時期であり、社会に参入するにあたり役に立つ、文化の本質的価値を教わる時期です。教師と生徒は共に細やかなさを要求されると同時に、実り豊かな旅をすることになります。教師は挺身し、熟考を続けながら、賢明に辛抱強く生徒の案内役を務めるのです。

この旅路において二つの自由が出会います。先生方の成熟した自由と形成過程にある生徒の自由と。この二つの自由は対話し、意図と目的との調和をめざして相互の困難を克服し、理解しあうようにならねばなりません。大人の権威、大人が具現している価値から生じる権威は奉仕です。そして権威は、その内容を生徒が自分のものとするにつれて徐々に手を引いていくはずですが、生徒の自由が成長し強められるためには、教育者の自由を与える活動が必要です。これなくしては、生徒の自由は十分に成熟することはできません。こうすれば、権威と自由との間の衝突はなくなります。衝突があるとすれば、それは一方が権威主義に墮したか、他方がわがままに陥ればなりません。

家庭と学校は手をたずさえ、児童・生徒・学生の教育と人間形成のために尽力しなければなりません。

複雑化した現代社会では、教育面で果す学校の役割が重要なものとなってきます。

学校は家庭と協力して、適切な組織を通じて、まず第一に教育プログラムの本質的内容が効果的であるよう形成の仕事に携わります。両親と教師は、子供や生徒にとって一番ためになることについて話し合わなければなりません。学校と家庭との関係は、最も深い次元で理解しなければなりません。横道へそれるのを避け、形成の目的を強化し、具体的によい結果がでるよう努力しなければ

ならないのです。義務教育の期間に続くのは青年期です。青年期は資格を要する職業についての大学での勉学の準備を、学生たちに課しています。この年代の学生にとっても、目標・言及点となる大人の存在が重要です。青年期には、知的能力が全ての点で成熟を遂げます。考え込む傾向が顕れ、人間の神秘を発見し、問題をはらんだ自己の存在を感じし、社会に存在する緊張状態に気づきます。自分の人生の不確かな面が見えるようになり、より一層個人的に神と関わり、目標を定め組織的な活動を通してその目標を実現させることができるようになります。人間の内面の驚くべきものを感知するのです。教育者は全て、人間の成長の本質的な基盤となる宗教的・倫理的価値についての知識を持っているはずですが、このようにして青年は、人生の豊かさに驚嘆しながら熟考します。しかしその一方、当惑もするでしょう。反抗したり、論争したりという、青年期特有の態度は不完全で脆い性格に由来します。こうしたことは、青年には指導者が必要なることを示しています。つまり、彼らの必要を理解し、適切な方法でその必要に応えることのできる指導者が。

こうして学校には様々な科目(専門)についての技術的科学的理解力を育むことのできる教師、しかも青年たちが人間という比類なきものに敬意を払い、責任をもった創造力あふれる参加を激励するような人間形成を与え得る教師が求められているのです。

超越した 叡知の愛

摂理シリーズ③

1

度々受ける問い、時には疑いに発展していくのですが、今日この世に神はおいでになるのか、おられるとすればどのような方法で現存なさるのか——この問いに対してキリスト教信仰は、明快で決然たる確信をもって答えます。「神は造られた全てのものに心を配り、摂理をもって治められる」と。この簡潔な表現で第一バティカン公会議は啓示された神の摂理についての教えを述べています。啓示によれば聖書全体に沢山の表現が見えますが、神の摂理という概念には二つの要素があります。一つは「配慮」、もう一つは「権威」(統治)です。この二つの要素は相互に浸透しています。創造主である神は、地上の王の統治権力との類推から全被造物を越えた至高の権威を有すると言います。全ての被造物は造られたという事実によって創造主である神に属し、神に依存する存在なのです。ある意味では、どんな被造物も「自分自身」よりも「神」に属しているわけです。被造物は何よりもまず「神のもの」であり、「自分のもの」となるのはそのあとです。どんな地上の権威と従属からも想像がつかないような、根本的に完全な従属関係にあるのです。

2

この類比には、ある意味で神の摂理の核心に触れる真理が表れています。同じ真理を聖書は諭えて述べています。「主は私の牧者、私には乏しいものがない」(詩篇22(23)・1) 何と豊かなイメージでしょう。昔の信仰告白や初期キリスト教の伝承が摂理の真理のことをギリシア語の「パン・クラートル」に相当する「全能者」という言葉でいい表したとしても、聖書にある「牧者」ほど啓示された真理の深さと美しさを生き生きと伝えることはできなかったのです。(全能者では「牧者」の深さと美しさを十分に伝えているとは言えません。実に神の摂理とは「心遣いに満ちた権威」なのであり、知恵と愛による永遠の計画を通して造られた世界、とりわけ「人間世界のこと」をお治めになります。(配慮あふれる権威)であり、力と共に優しさに満ちた摂理です。第一バティカン公会議が引用する知恵の書の本文によれば、「この世の果てから果てまでその力を及ぼしすべてを巧みにつかさどる」(知恵の書8・1)、造られたものの全てを抱き、支え、配慮し、いわば育み養うと聖書の別の喩えは語ります。

3

ヨブの書はこのように言っています。「見よ、神の威力はこの上ないものだ。神のように教える者がどこにあらうか。……水のしずくを海から引き出し、その蒸気を雨に変えるのは神だ。雲がその雨を降らせ、それによって神は民を養い豊かに食べものを与えたもう」(ヨブ36・22、27、28、31)

「神は雲に雹を積み上げ、暗い雲から稲妻を放つ。神が雲をまわしたまえば、雲は定めのとおり回る。地上の世の面で、それらはすべて神の命に従う」(同37・11、12)

さらにシラの書でも、「主は命じて雪を降らせ、稲妻を投げるようにと定められ、……」(シラの書43・13)

詩篇も、神の「恐るべき業の力」「大いなる慈愛」、その威光と栄光の輝きを称えて「主はすべてを慈しみ、そのあわれみはすべてのみ業の上にある」と歌い、宣言します。「すべての目が主に希望をかけ、時がくれば主はその全てに糧を与え、御手を開いて、生きる者に望むがままに、人を飽かせたもう」(詩篇144・5、7、9、15、16)

さらにまた「あなたは獣のために草を生えさせ、人に役立つ獣に餌を与え、こうして人は地から麦を、人の心を喜ばすぶどう酒を、顔を光らせる油を、人の心を強めるパンを受ける」(同103(104)・14、15)

4

聖書は幾つもの章句を費やして世界の及ぶ至高の権威としての神の摂理を賛め称えます。あらゆる被造物、中でも人間に対して特別の配慮を示すため、神の摂理は造られたものの効果的な力を利用なきやいます。人間に備わる思慮分別という事実との類比を用いて言えば、そこに創造主の限り無い先見の明に富

5

聖書の表現では、事物の統治を直接神に帰していますが、第一因としての創造主である神の行動と、第二因としての被造物の行動とを、はっきり区別しています。ここで私達は現代人の心を占める問題に直面します。被造物の自主性はどうなるのか、この世における能動因の役割は何なのか、という問題です。カトリックの信仰によれば、創造主の卓越した叡知こそが、神は摂理としてこの世におられること、また造られた世界は第二バティカン公会議の言う「自律性」を持つ、という事実を保証しています。しかし一方では、万物の存在を保ち、そのものたらしめるのは神であることも事実です。つまり「造られたもの本来の性質によって、物質的存在はそれぞれに固有の秩序と法則を与えられている」(『現代世界憲章』36)

他方、神の支配の仕方として、被造物は実際に真の自律性をもっており、これは「創造主の意向と一致した」(同36)事柄です。

神の摂理は、まさにこのような「造られたものの有する自律性」のうちに示されます。そこには神に固有な力と「優しさ」がはっきりと見て取れます。この自律性の内に全てを包む超越的な叡知、私達には計り知れない知恵としての創造主の摂理が確認されます。あらゆるものに創造主の力と万物を統べる力が顕現しています。それでも知恵の書の「優しさ」が指摘するように、第二因としての



『拓』(定価一六〇〇円、〒三〇〇円)

『祈りと神の現存』(定価 九〇〇円、〒二〇〇円)

※表示定価は税別です。

説教・講話・書簡等の抄訳

被造物の役割は損なわれることなく、世の形成と発展のダイナミズムの内に存在します。

6 従って、世界の内的形勢に關しては、神の似姿として造られた人間は当初から本質的に大変重要な地位を占めています。創世の書によれば、人間は「つかさどり地を支配する(創世1・28参照)ために造られたのです。理性を備えた自由なものとして、しかしあくまでも被造物の一員として人間は、この世を統治する創造主の御業に与り、トマスの美しい表現を借りれば、ある意味で「自らの摂理(配慮)になるのです。またそれゆえに最初から人間には神と被造物、特に他の人々に対する特別な責任が課せられています。

7 神の摂理についての、こうした旧約時代の伝統にのっとった考え方は、新約によって確認されより豊かなものとなりました。摂理に関するイエズスの言葉のうちでも特に感動的なのは福音史家マテオとルカの記した次の教えです。「何を食べ、何をのみ、何を着ようかと心配するな。それらはみな異邦人が切に望むことである。天の父はあなたたちにそれらがみな必要なことを知っておられる。だからまず神の国とその正義を求めよ。そうすればそれらのものも加えて与えられる。(マテオ6・31〜33、ルカ12・29〜31参照)

「二羽のすずめはニアサリオンで売っているではないか。しかもその一羽さえ、天の父のゆるしがなければ地に落ちぬ。あなたたちは頭の髪の毛までもすべて数えられている。

恐れることはない。あなたたちは多くのすずめよりも値打ちがある。(マテオ10・29〜31、ルカ21・28参照)

8 これらの教えによって主イエズスは、旧約聖書に含まれる神の摂理の教えを確認するだけでなく人間、それも個々の人間の問題に深く立ち入り、神が父としてこの上ない細やかな心遣いをもって接してくださることを示しておられます。いと高き御者は、人間の逃れ場、岩、力であるとたたえる詩篇の章句は本当に素晴らしいものです。例えば詩篇90、「いと高き者の守りのものに住み、全能なる者のかげに宿るものは、主に言う、あなたは私の逃れ場、私の岩、私の信頼する神。(…)あなたは、『主は私の逃れ場』と言っていて、いと高き者を自分の住居とした。(…)私に頼ったから私は彼を救おう。私の名を知っているから私は彼を高めよう。私にこい願えば彼に答えよう。彼の苦難の時、私はともにある。」(詩篇90(91)・1〜2、9、14〜15)

9 とても美しい表現です。けれどもキリストの教えは、さらに深く完全な意味を明らかにしています。事実、それこそは御子の言葉、摂理について語られたことをすべて(お見通し)になり、御父の秘義の完璧な証人となられた御子の言葉なのです。すなわち摂理と父としての心遣いの秘義であり、野の草やすずめのような最も小さなものに至るまで、全ての被造物に愛を注がれる摂理の秘義なのです。ましてや、人間によくしてくださいとはいはずがあるでしょう。——これこそキリストが一番強調したかったことです。神

10 さらにイエズスは、創造主からこのような特権を与えられた人間には、摂理によって受けた賜を用いて神に協力する義務があることを重ねて強調なさいます。このため人間は感覚的・物質的な有限の価値のみで満足することはできません。人間は第一に「神の国とその正義」を探し求めるべきなのです。なぜなら「そうすれば、それらのもの(地上の物事)も加えて与えられる(マテオ6・33参照)のですから。キリストの言葉は、摂理の特別な次元に私たちの注意を促します。摂理の中心には理性と自由を備えた存在である人間がいるのです。

賢慮の賜 聖霊の賜についての考察を続けます。今日は、賢慮の賜について考えます。日常生活を営むにあたり、私たちは道徳的な面で種々の選択をしなければなりません。その選択をする私たちの良心に光を与えるのがこの賢慮の賜です。数多くの危機的な事態と世界中に広がった真の価値についての不確かさに悩まされる今日、特に必要が痛感されること、それはいわゆる(良心(複数)の建設)です。情念にかき乱された人間の心に容易に入り込んでくる破壊的な要素を帳消しにし、健全で肯定的な要素を導入しなければならぬ——人はこの点に気付いています。教会は先頭に立って道徳の再興に力を尽くさなければなりません。事

賢慮の賜

賢慮の賜は良心内の新たな息吹のようなもので、正当なこ

と、適切なこと、霊魂に最も適したことは何かを教えてください。(聖ポナベントウラ、「聖霊の七つの賜について」VII.5参照) こうして良心は福音書にある「明るい目(健全な目)を獲得する。言ってみれば、目が新しい瞳を得た結果、いかに複雑で新しい状況においても何をなすべきかが見えるようになるというわけです。キリスト信者はこの賜の助けを受けて、福音の価値、中でも山上の説教に言い表されている諸価値のほんとうの意味を洞察するのです。(マテオ5・7)

おとすわけで皆さん、賢慮の賜をお与えくださいと、願います。私たちが自身のため、そして仕事の性質上、難しく辛い決定を余儀なくされる教会の牧者のため特にこの賜を聖霊に乞い求めましょう。連禱の中で(良き勧めをたもう御母)と称される聖母マリアに取り次ぎを願います。(八九・五・七)

不変の教え

環境問題と和解

環境問題と倫理

経済・社会生活と仕事との関係において、今日、ますます鋭く問題提起がなされているもの一つに環境問題(正確には生態学に関する問題)があります。確かに人間は、被造物を(支配し)、世界という(畑を耕す)役目を神御自身から託されました。しかしそれは、神がお与えになった姿を尊重して、すなわち知性と愛をもって果すべき役目です。神が与え続けておられる賜に対して人間は責任を感じなければなりません。人間は自ら所有する賜を、出来ればさらに改善の上、主の賜の将来の受け手、つまり後に続く世代に渡さなければならぬのです。創造主によって人間に与えられた支配権は、決して絶対的な権限ではありませんし、利用する自由、誤用する自由のすべてを含むわけではあります。すなわち、人間が勝手放題にすべてのものを処分し得るわけではないのです。創造主自身によって原初から課せられた限界、枠組は——それは「その木の果実を食べてはならない」(創世2・16〜17参照)とする禁止事項によって象徴的に示されています——自然界とかかわりをもつとき、生物学的法則に従うのみならず、道徳的にも従順でなければなら

ないことを、そしてそれを破れば決して無事にすまないことを教えています。真の意味での開発・発展を達成しようとするなら、自然の適性利用、一部天然資源の再生不能性、でたらめな工業化の悪影響という、重要な三項目に対する配慮を無視すべきではありません。この三つの思考の視座は、私たちの良心を開発・発展の倫理的次元へと招いていくのです。『真の開発とは』32(使徒勸告Christifidelis laici, 43)

創造された世界との和解

キリストの使命との密接な関係のもとでなら、教会の豊かで複雑な使命を人間の和解という仕事に要約できます。すなわち、神、自分自身、兄弟たち、すべて創造された世界との和解という使命です。しかも、この使命は永続的なものです。何度も述べたように、教会は、その性質上、常に和解を仕事としているからです。(…)

先に述べた四つの和解のための方法と手段を提示すること、この点からも、和解をもたらすことこそ教会の本質です。具体的な方法は、心の悔い改めと罪に対する勝利のことです。罪には、利己主義、不正義、他人の搾取や支配、物的善への執着や、みだりに快楽を追い求め

ることなどがあります。手段とは、忠実な愛のこもった心で神の御言葉に耳を傾けること、個人的な、あるいは共同体としての祈り、そして、和解の真の印であり道具である秘跡——なかでも、その名が示す通り悔悛(和解)の秘跡——をあげるべきです。この和解の秘跡については、後ほどお話ししたいと思います。(使徒勸告『和解と悔悛』本紙八五年二月号に抄訳あり)

所有者ではなく、管理人

今日の祝日は、キリスト教の啓示全体の中心となる秘義を私たちに思い起させます。それは、私たちの地上の巡礼が目指している究極のゴール、三位のペルソナ、御父と御子と聖霊とが一つの神である、という秘義です。

神なる師の正確な教えによると、三位一体の秘義を黙想することは、主が十字架を通して獲得してくださった永遠の生命そのものに与ることなのです。「永遠の生命とは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエズス・キリストを知ることであります」(ヨハネ17・3)と御父への祈りの中で、イエズスは

はお話しになりました。その時以来聖霊は私たちがこの崇高な知識を受け入れられるよう、準備してくださいます。そのために、聖霊が遣わさ

ある地方全体が無制限の開発や手に負えないほどの汚染に脅かされていることは周知の事実です。地球上の森林資源を保護すること、土地の砂漠化や貧弱化に反対すること、人間と動物、植物に害を及ぼす有毒物質の普及を避けること、大気を保全すること、いづれを取り上げて、積極的に適格な協力を、無軌道な利害対立を避ける努力や制限のない国境開放がなければ、実現できないことです。(…)

国際的な共同体が自法的技術的手段を備えて環境を保護

聖霊の使命を知らせるに当り、イエズスは実に次のように言われています。「だがその方、つまり真理の霊の来るとき、霊はあなたたちをあらゆる真理に導くだろう」(ヨハネ16・13)どの真理に? それは、御父と御子と聖霊の啓示全てです。



信者の生活と三位一体

キリスト信者の一生は、本質的に「三位一体」の旅路です。霊はキリストの教え、福音とキリストの模範についての万全の知識に私たちを導きます。他方、この世にいられたイエズスは、私たちが御父を知るよう助け、御父へと私たちを導き、唯一の崇高な仲裁者・司祭として、御父と和解させてくださいます。イエズスは御父に至る道なのです。聖霊もまた「主」神です。(コリント②・3・17)「主の霊のあるところ

には自由があり」(前出)ます。従ってキリスト教倫理は三位一体の倫理です。私たちが完徳と聖性に導くものは霊だからです。聖霊の仕事は、私たちがまさに御父と御子の「知識」へと導くことにあるからです。キリスト信者の生活の全ては、三位一体の秘義を中心に動いています。全ての物事はこの無限の秘義のためになされ、それに向かわなければならぬのです。

し、ある人たちの利己主義が引き起こした乱用が他の人たちに害を与えることのないようにすることこそ、緊急に必要なことです。キリスト教の信仰によると、人間を地の面に置かれたのは神です。すなわち、人間は地に対して責任を負っているけれども、それを自由に処分できる所有者ではなく、管理者であることを示しているのです。人間は生き生きとした豊かなこの地を後の世代に伝えなければなりません。(マダガスカルで、外交官たちへ。八九・六・二九)

愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちが行動し、働き、労苦し、奮闘しなければならぬのはどんなゴールのためか、どんな無限の光栄のためであるかを忘れることなく、私たちの生活の「品格」を下げないように努めましょう。私たちがどんなに素晴らしい報いのために招かれているのか忘れないように。

この秘義を他のどんな被造物よりもよく知り、崇敬し、愛された処女マリアが、私たちの手をひいて導いてくださいますように。(五・二一九)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 二十部以上の一括購入なら送料不要

振替 郵便 神戸 3-72393